

連載

私の臨床検査史

わが国における精度管理の歩み

河合 忠

Tadashi KAWAI, MD

国際臨床病理 (ICP) センター所長・自治医科大学名誉教授

ISQCの足跡 (1)

● ヨーロッパでスタートしたISQC

ISQCは、International Symposium on Quality Control, 精度管理に関する国際シンポジウムの略称であって、わが国では臨床検査分野の専門家の間では長い間親しまれてきた国際会議である。

ISQCが初めて開催されたのはスイスのジュネーブで、1967年に開催されたThe First International Symposium on Quality Control in Clinical Chemistryである。以前にも触れたように、世界で初めて管理血清を市販したのは、米国フロリダ州デイド郡マイアミ市にあったDade Reagents, Inc. (後に、American Hospital Supply Corporation (AHSC)の傘下に入り、現在のDade-Behring社に合併された)であり、世界にマーケットを拡大しつつあった。当時のDade社はヨーロッパではドイツのメルク社と合併のMerk + Dade社を通じて商品を提供していたが、ドイツの社員の発案でISQCがスタートしたとのことである。熱心な検査室で実施されていた内部精度管理手法が、漸くヨーロッパでも広く普及し始めていたことから、Merk + Dade社が全面的に支援して、この分野での著名な専門家を招いて国際シンポジウムを開催しようということであった。

当時、キューバ国はカストロ政権に移り、共産主義を掲げた革命政府が誕生していたので、自由を求

めて多くの有識者及び裕福な人々が米国に亡命しはじめていた。その中の1人で、キューバの大学病院病理学主任を務めていたGuillermo Anido博士がマイアミ市に移住し、Dade社の学術部長をされていたので、Anido博士とロンドンの聖マリア病院の化学病理学者 (Chemical Pathologist) で世界的に著名な臨床酵素学者であったSidney B. Rosalki博士が中心になってISQC-Genevaが計画された。第1回ISQC-Genevaの組織委員長はAnido博士が務められたが、第2回以降はRosalki博士が学術組織委員長として、1977年に開催された第7回ISQC-Genevaまで会の発展に大きな功績を残された。

● ISQC-日本への導入経緯

今は消滅してしまった株式会社ミドリ十字にあった試薬事業部が独立して設立された国際試薬株式会社 (International Reagents Corporation, Inc.; IRC) が引き続きDade社の商品の輸入販売を続けることになった。筆者がマイアミ大学医学部病理学教室・デイド郡立ジャクソン記念病院病理学部のレジデントとして4年半卒後教育を受けている過程で、Dade社のGriffiths社長と親交を深め、免疫血液学の実技トレーニングをさせていただいたことから、1962年12月帰国後はミドリ十字試薬事業部とも交流を続けていた。

IRCの初代副社長は、米国のAHSCから派遣されたKelsy氏であり、会社の実質的な最高責任者であった。当時の手帳を調べてみると、彼が就任挨拶のために東京を訪れたのは1970年6月26日であった。IRCから適当な懇親の場を訊ねられたので、遠路はるばる日本に赴任した彼を同行したのは芳町界隈の小さな料亭「喜久栄」であった。(本料亭は、筆者にとって思い出の残る料亭であったが、現在はなくなっている。)一通りの挨拶が終わり、程よく酒気を帯び、じょうぜつになって英会話を交わすうちに、Kelsy副社長が漏らされたのは「ISQC-Geneva」の様子であった。やがて、「ISQC-Tokyo」の可能性にまで議論が進んでいった。その時は、「ISQC-Geneva」の詳細が不明であったが、Kelsy副社長が8月、11月と上京されて、詳しい情報が伝えられたことで、「ISQC-Tokyo」の開催についての具体的な話し合いとなった。早速、当時、日本臨床病理学会の小酒井 望会長にご意見を伺い、日本での開催のための条件などについて打ち合わせをさせていただいた。そして、1970年12月22日、筆者は家族と一緒にKelsyファミリーを訪れ、家族ぐるみの交際が始まるとともに、「ISQC-Tokyo」の開催について合意することとなった。

● 第1回ISQC-東京の開催

Kelsy副社長と小酒井 望博士、そして筆者の間で基本的な合意に達した点としては、ISQC-Tokyoの開催のための費用は全面的にIRCとDade社が負担し、

開催の様式や演者については学術組織委員会が責任をもつこととなった。当初、日本臨床病理学会が主催するという案も浮上したが、結局、多方面から学識経験者を集めて学術組織委員会を立ち上げることとなり、会長には小酒井 望順天堂大学教授、学術組織委員長には筆者が選任された。その他に、学術組織委員会の推進役として、順天堂大学医学部臨床病理学教室の林 康之助教授とKelsy IRC副社長が副委員長に就任し、第1回ISQC-Tokyoの準備に入った。まず日程の調整にあたっては、初めての試みであるから十分な準備期間が必要であること、臨床検査関連の年次集会在が予定されていない時期で、しかも夏の猛暑の時期は避けることから1974年6月1～2日の2日間とし、会場も東京プリンスホテルですることとした。また、事前の準備会で、ヨーロッパと米国から精度管理に造詣の深い専門家を特別講演者として招待することの他に、近隣の東南アジア地域からできるだけ多くの専門家を招待することとし、日本国内からも関係の方々をお招きすることになった。そこで、東南アジア諸国と交流の深かった札幌医科大学病院検査部の佐々木禎一助教授にプログラム委員長をお願いすることで意見が一致し、さらに予算等を中心に検討する総務委員会についてはKelsy副社長を委員長に選任した。このように内々の準備が進んでいる間にKelsy副社長が米国へ戻り、後任にE. J. Martica氏(写真1)が副社長として赴任されたが、本社のDade社の意向もあり、引き続き第1回ISQC-Tokyoの開催に向けて



写真1 第2回ISQC-Tokyoを開催するための打ち合わせ後の夕食会にて(1975年 於:京王プラザホテル)
左から尾川政也氏(IRC)、Martica副社長(IRC)、尾川夫人、一人おいて筆者、小酒井 望先生夫妻、生垣 賢専務(IRC)



写真2 第5回ISQC-Tokyoでのレセプションにて海外からの招待者と談笑しているDarnell社長(American Dade)(中央)

準備を進めることとなり、正式の学術組織委員会の第1回会合が開催されたのは、1973年6月で第1回ISQC-Tokyo開催の丁度1年前であった。

特別講演には、ドイツのJ. Büttner博士、オランダのE. J. van Kampen博士、米国のG. Anido博士、そして日本からは齊藤正行北里大学教授にお願いすることとなった。また「アジア太平洋地域における精度管理プログラム」と題するシンポジウムを企画し、オーストラリアからP. I. A. Hendry博士、ニュージーランドからF. B. Desmond博士、フィリピンからV. Basaca-Sevilla博士、香港からH. J. Lin博士、台湾からJui-San Chen博士、韓国からSang-In Kim博士とアジア・オーストラリア圏の代表的な専門家に講演をお願いすることとなった。その他に、わが国を代表する専門家による講演も含めることとしたが、準備の都合もあり一般演題の応募は避けた。

ISQC-Genevaに類したプログラム編成を基本としながらも、日本で開催するISQCの特徴を出すために精度管理サーベイを実施することとした。当時、既に日本医師会主催による精度管理調査が全国的に広がりを見せていたが、コンピュータ集計によるサーベイ結果だけでは誤差要因の解析が進み難いとの意見を基に、よりきめ細かな解析と誤差要因の特定を含めた精度管理調査を実施することとした。そこで虎ノ門病院生化学科の北村元仕博士と慶応義塾大学附属病院検査部の菅野剛史博士のお二人に企画

と解析をお願いし、第1回としてLDとALPの2つの酵素を取り上げ、その解析結果を第1回ISQC-Tokyoで発表していただいた。これが、その後の日本臨床化学会(JSCC)の酵素専門委員会の活動に発展し、さらに日本医師会精度管理検討委員会による精度管理調査における施設間差の縮小及び日本臨床検査標準協議会(JCCLS)の日本認証酵素標準物質(JCERM)作成の事業へと引き継がれている。後に、Dade社のG. Darnell社長の協力によってISQCによる表彰制度(Scholarship Award)が始まり、精度管理領域で著しい業績をあげられた若手研究者を表彰することとなった。酵素測定における業績により菅野剛史博士が最初のScholarship Awardを受けられたのが第2回ISQC-Tokyoであった。この表彰制度はG. Darnell氏がDade社長(写真2)の在任中、第7回ISQC-Tokyoまで続けられた。

臨床検査の精度管理について関連団体の理解をさらに進めるために、顧問をお願いし、開会式へのご臨席をお願いした方々は、武見太郎日本医師会長、柴田 進日本臨床病理学会監事、山村雄一日本臨床化学会長、滝沢 正厚生省医務局長(現・厚生労働省)、内藤良一ミドリ十字社長、並びにG. Anido博士であった。

こうして準備も整い第1回ISQC-Tokyoが開催され、参加費は有料であったにもかかわらず200名余の参加者を得て成功裏に終わることが出来た。しか

し、最後まで難航したのはISQC-Tokyoの会議録を出版するか否かであった。会議録を出版するについてIRC側で予算を計上していたが、英文出版とするか、和英混合出版とするかでなかなか結論が出なかった。しかし、再三学術組織委員会で議論をした結果、英文出版物として刊行することとなった。精度管理そのものが日常業務の中での地味な努力の一環として存在し、それらの活動をまとめても研究論文を主体とした学術誌にはなかなか採用されないことや、わが国での精度管理の活動が十分に海外に紹介する機

会がないことなどがその背景にあった。編集委員長として、第5回ISQC-Tokyoまでプログラム集、講演抄録集と会議録の編集を担当されたのは、IRCの生垣 賢専務取締役（写真1）であった。彼は、医科大学出身であり、株式会社ミドリ十字の試薬事業部長からIRCの役員を務められていたので、大変なご苦労をお掛けすることとなった。

（次号へ続く）

編注）文中の所属は当時のものを記載しております。何とぞご了承ください。